



昨年4月より宮城県女川町に派遣されていた市職員川崎大也主査が派遣期間を終えました。1年間の業務を通じて、見て感じて行った、川崎主査による復興奮闘記です。内容の一部は前回までのものを再掲・再編集しています

まちを一から創りなおす、一からまちづくりを行う。



『ここから新しいまちを創りなおすんだ!』



▲復興まちづくり着工式で鉄入れを行う女川町の青年たち

復興元年

このような経過を経て、昨年「復興まちづくり着工式」が行われ、復興への槌音を響かせることができました。

それは小さな一歩かもしれませんが、町民の皆さんが将来に希望を抱くことができる、女川町復興への大きな前進であることに間違いありません。

住民の皆さんと共に

女川町は「とりもどそう笑顔あふれる女川町」を基本目標に定め、様々な復旧・復興事業を行っています。

しかし、単に復興といっても、平地部の大半が津波によって被災したため、一からまちづくりを行わなければならない、それは決して容易なものではありません。そして、復興事業を進めるためには、町民の皆さんに理解を得なければなりません。被災した方々には再建するための支援等についても、しっかり理解してもらう必要があります。



▲女川町の小学校児童たちの作品「まげねっちゃん」「負けんぞ」です

平成23年3月11日、未曾有の大地震・津波により女川町では人口10,014人のうち、死者・行方不明者あわせて830人と、1割近い町民の尊い命が奪われました。建造物は全壊68・1%と、その打撃は壊滅的なものでした。それから1年後の平成24年4月に、私は復興支援のため、女川町の職員として第一歩を踏み出しました。配属先は復興推進課用地係で、被災した土地の買取や高台移転先の用地買取、測量業務などを担当しました。



▲「あの日」から10日後の女川町内。当たり前だった日常はもうそこにはありません



▲津波の到達高の標示。床より1.95mと書かれていますが、実は海拔16mの丘にある建物での数値なのです



▲もう一度、美しいまちへ（震災前の女川町）

そして私たちは…

1年前、初めて女川町に足を踏み入れた時目にしたのは、そこにあつたはずの街並みはなく、そこにいたはずの人々がいない凄惨な光景でした。横倒しになった建物、見上げるほどに高く積まれた瓦礫に身震いし、言葉を失いました。公私を通じ、家も思い出も津波に流され、大切な家族を失った方とも接しました。

将来起こる南海地震では、香南市も何らかの被害を受けるでしょう。しかし、どのような状況においても必ず生きなければなりません。そのために自助、共助を含め、一人一人が何をすべきかを考え行動していただきたいと思います。また、女川町を含む「被災地のこれから」に少しでも関心をもっていただけばうれしいかぎりです。

香南市では今年度も職員を派遣しています

派遣期間が終了した川崎大也主査に代わり、この4月から平井彰洋主査が女川町に派遣されており、川崎主査の後任として復興支援に取り組んでいます。こうなんNOWでは引き続き、復興の様子を掲載していきます。



「復興に少しでもお役に立てるように、そして、女川町での経験を香南市でも活かせるように全力で頑張りますのでよろしくお願ひします」

平井 彰洋



二人がバトン代わりにしているのは、「Onagawa fish」というキーホルダー。女川町は漁業の盛んな町です。「女川でお魚がドットと描れますように…」との復興への願いを込めて作られている地元の人たち手作りの木工品です。